

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

田中光顕関係文書紹介(2)

著者	安岡 昭男, 長井 純市
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	53
ページ	45-59
発行年	2006-10-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/3047

田中光顕関係文書紹介（二）

安 岡 昭 男
長 井 純 市

はじめに

本号で紹介するのは、前号に引き続き田中光顕宛伊藤博文書翰（未之巻、亥之巻、一七通、全）と同山県有朋書翰（卷之一、卷之二、一八通、一部）である。伊藤書翰については、本号でそのすべての紹介を完了する。

各書翰の番号は、前号同様、田中光顕関係文書研究会が便宜的に付したものであり、伊藤書翰については、前号で紹介したものからの通し番号で表記してある。

前号で紹介した伊藤書翰には、岩倉具視を全権とする欧米派遣使節団（いわゆる岩倉使節団）に関係するものが含まれていた。田中は会計担当者として使節団に随行したことから、伊藤から田中に宛てて金銭出納に関する書翰が発せられている。その中には、日本人留学生損失金借用問題に関わるものがあった（すでに、尾崎三良『尾崎三良自序略伝』上〈中央公論社、一九七六年〉の「米人プールの詐偽」「その善後策に奔

走す」に詳しく記されている）。岩倉使節団は、銀行業を営む狡猾な外国人の被害者となって留学費用を失った日本人留学生にその経費から、さらに日本の外務省を通じて、金を用立てるに至ったのである。明治六年二月九日付田中宛伊藤博文・大久保利通書翰に登場する戸田三郎とは被害にあった留学生の一人尾崎三良のことである。

また、これ以上に深刻な問題を報じた書翰があった。年代不明四月一日付書翰である。田中の宮内大臣時代（明治三十二年二月～同四十二年六月）のことであるが、朝鮮の国宝ともいうべき五重塔が窃取されて日本に持ち込まれたという事件に関するものであった。そして、この五重塔は上野公園に置かれたようである。この問題は日朝間のみならず、国際問題化しかねないものであった。同書翰は、朝鮮における英字新聞（ソウル・プレス）の記事を同封して、宮内省が煽動をしたかのように報じられていることを伝えている。宮内省としては朝鮮王室から贈与されたものとしてこれを扱い、返礼のために機関砲を贈呈する予定であったようである。伊藤は、これに強く反対している。この事件の顛末は不明であるが、政治、外交、軍事、経済などの視点から見る日朝関係とは別に、文化交

流的な観点からの日朝関係における負の側面を伝える史料といえよう。

なお、田中自身、明治天皇の御下賜品や遺品、幕末の志士の遺墨や遺品などを含めて、いわゆる勤王の精神につながる文化財の収集にはことのほか熱心であった。彼が残した膨大な収集品は、今日、青山文庫（高知県佐川町）、多摩聖蹟記念館（東京都多摩市）、幕末と明治の博物館（旧常陽記念館、茨城県大洗町）、早稲田大学、そして宮内庁にそれぞれ分けられ保管されている。そうした文化財収集志向が、この五重塔事件に関わっているのかどうかは不明である。

さて、本号で紹介する伊藤書翰には、第一次伊藤博文内閣（明治一八年二月～同二二年四月。田中は内閣書記官長。この職は今日の内閣官房長官にほぼ相当する）時代のものが多い。全体として短文で用件を伝えたものが多いが、郷純造（明治一九年三月～同二二年一月大蔵次官、旧幕臣の子）らの人事に関わるものが目立つ。その中で、明治二〇年八月五日付書翰は、ある警察官僚の人事異動案に対して伊藤が強い語調でそれを批判したものである。一国の総理大臣が、一官僚の人事異動案に口をはさむことは奇妙なことに見えるかも知れない。しかし、この伊藤の姿勢は、最終書翰の内容と通底するものがある。その書翰は、時代を遡り、維新の争乱が収まった直後の新政府軍兵士の処遇について、当時兵庫県知事であった伊藤が部下に起草させた意見書である。その中で伊藤は兵士の功労を十分に顕彰し、洋式の朝廷直属軍を組織するよう提唱している。要するに、伊藤にとって人事は国家運営の重要な要素の一つであったのである。

その他、陸軍省起案の検閲条例改正案、進級条例改正案（この両改正

案は、いわゆる月曜会事件に関わるものである。同事件については、大澤博明「月曜会事件の再検討——所謂四將軍との関係を中心に——」1・2、大阪市立大学法学会『法学雑誌』第三五巻第一、二号、一九八八年を参照）、長崎県の上水道工事費国庫補助問題など法制、政治に関わる内容が含まれている。明治二一年五月二三日付伊藤書翰は、同年四月に第一次伊藤内閣が井上馨外相の条約改正交渉問題（いわゆる鹿鳴館外交などと称され、批判的に捉えられることが多い）を原因として退陣し、黒田清隆内閣が発足したのちも引き続き内閣書記官長の職にあった田中が辞意を洩らしたのに対して、伊藤前首相がこれ进行いと思ひとどまらせようとしているものである。田中の留任は、おそらく事務引き継ぎと黒田内閣が伊藤系人脈の選択的残存を図ったことによると思われる。田中は、長州閥の領袖の一人であった伊藤と、同じく薩摩閥の領袖であった黒田との緊張関係にはさまれた辛い役どころを演じなければならなかったようである。結局、田中はこの五月に内閣書記官長を辞した。

さて、今回から新たに紹介する山県有朋書翰では、まず最初に田中と山県との親密な関係が目を引く。それは、発受信人それぞれの表記の仕方に表れている。たとえば、伊藤書翰では、伊藤はフォーマルな書き方をしているのに対して、山県書翰では、その内容が公務であれ、私事であれ、プライベートな書き方をしている。具体的には、伊藤は自らをもっぱら「博文」と記し、受信人の田中を姓で、あるいは姓と職名を合わせて記している。伊藤の号である「春畝」や、あるいは彼の別荘があった神奈川県下の夏島を用いて「夏島漁夫」「蓬萊島主」と記したものは僅かである。一方、山県は自らを「椿山莊主」「芽城山人」「無鄰庵主」

「素狂」などと記し、受信人の田中を「芭蕉庵主」あるいは、その号である「青山」、あるいはさらに田中をもじって「多奈賀」などと記すことも多かった。

よく知られているように、椿山荘とは、東京府内の椿の名所として知られていた台地に山県が築造した邸宅である（旗本の下屋敷を明治一〇年に取得したという。敷地は約一万八千坪である）。今は、山県家の手を離れて、都内でも有数の結婚式場、宴会場施設として、その名をとどめている（藤田観光株式会社の経営による）。芽城山人とは、もちろん椿山荘の所在地である目白をもじった山県の自称である。その後、椿山荘は大正六年に山県が八〇歳の誕生日を迎えたのを機に、翌七年藤田平太郎（男爵、藤田組第二代経営者、長州藩出身の政商藤田伝三郎の嗣子である。現在、椿山荘を経営する藤田観光株式会社の起源はこの藤田組である）に旧館を保つことを条件として譲渡された。次に、無鄰庵とは、山県が幕末に京都で尊王攘夷派、そして尊王討幕派の志士として活動した往時を偲んで、鴨川沿い、二条橋畔に有した別邸である（明治二四年取得）。そして、素狂とは、かつて幕末の頃に狂介などと自称したことをもじったものである。なお、山県の号としては、「含雪」がよく知られている。他方、芭蕉庵とは、椿山荘に隣接する田中邸の名称である。このように書翰の発受信人に関する表記において、プライベートな名称を多用することは公私ともに両者が親密な関係にあったことを物語っている（佐々木隆「近代私文書論覚書——宛名表現に見る政治的関係」、近代日本研究会編『年報近代日本研究12 近代日本と情報』山川出版社、一九九〇年、参照）。

また、そうした発受信人の表記に関する特徴のみならず、書翰内容においても田中、山県兩人の親密な関係を伝えるものは多い。たとえば、個人資産すなわち土地、家屋、動産、さらに配偶者や趣味などに関わる内容を持つ書翰も多いのである（年代不明五月一日付、同一一月八日付、同一一月一八日付、同一一月二五日付、同一一月二六日付の追伸、同一二月三日付には「遠乗」ということが記述されているが、恐らく乗馬による遠出のことであろう。藩閥政府指導者には趣味として乗馬を楽しむ者が多かったようである）。さらに、早急の来訪を求める書翰もあるが、これまた、邸宅が隣接していることも含めて、兩人の親密な関係を示すものといえよう。兩人の関係は、幕末における京都での志士としての活動に端を発しており、生命を賭して行動を共にしたという思いが消えることなく晩年に至るまで二人を結び続けたようである。幕末維新の際に命を落とした志士たちの顕彰に意を注ぎ続けたことも兩人に共通している（年代不明六月一〇日付書翰には高杉晋作に関する史実調査に言及した記述がある）。

さて、今回紹介する山県書翰の中で注目されるものを二、三紹介しよう。全体として短文で用件のみを伝えたものが多いが、草創期の陸軍の法制や財政に関わるものが含まれている。年代不明九月一六日付と推定される書翰には、陸軍の経費節減に関わる山県の苦慮が田中会計監督長に切々と述べ立てられている。また、年代不明一〇月二七日付書翰は、軍人恩給令案に関するものである。

年代不明五月一日付書翰には、井上馨暗殺未遂事件と思われる情報に関する記述がある。山県が田中に内閣周辺で得られる情報の提供を求め

ている点から考えると、田中が内閣書記官長であった第一次伊藤内閣における井上外相の条約改正交渉絡みではないかと推測される。

以上をもって、今回紹介する史料の概要に代える。すでに、前号掲載の史料について、何人かの日本近代史研究者からそれぞれの研究に利用する旨の好意的な反応をいただいた。引き続き、本号掲載の史料についても多くの研究者に資することを願っている。

なお、前号同様、本号で紹介する史料全体の正確性については、最終的に目を通した長井純市が責任を負うものである。

最後に、註記について、封筒のない書翰の場合には、それについて特に註記しなかったことを書き添えておく。

伊藤博文書翰（その二、全）

「春畝公手簡未之巻」

以下、同巻所収の書翰。

32 明治（15）年2月4日

国宗之刀御入用之趣、即御使へ附し差上候間、御用済之上御返却可被下候。林、大江二囚云々近日閣議に詢ひ可申候。勿々敬復。

二月四日

田中先生

博文

〔封筒〕 表、田中陸軍少将殿、博文、刀一口相添。裏、。書翰冒

頭に異筆で「明治十五年二月四日」とあり。

33 明治（19）年3月5日

風邪今以不到快癒候に付、本日参朝不能。各大臣へ此段御通知有之度候。公文類要至急ものは御回付可被下候。他は可然御取計置可被下候。勿々頓首。

三月五日

博文

田中光頭殿

〔封筒〕 表、内閣、田中書記官長殿、博文、至急。裏、。書翰冒

頭に異筆で「明治十九年三月五日」とあり。

34 明治（19）年3月12日

過日来少々足痛に而難儀罷在、今日も出勤仕兼候故急用有之候得は高輪迄為御知可被下候。官報に而高橋は従前之通奉職之筈に有之候故曾根へ内々御申聞、局務は高橋へ任せ為取扱可成関涉せざる方可然と御談示可被下候。詳細は得拜晤可申述候。勿々頓首。

三月十二日

博文

光頭老台

〔封筒〕 表、田中書記官長殿、博文、至急。裏、緘。書翰冒頭に異

筆で「明治十九年三月十二日」とあり。

「春畝公手簡申之巻」

以下、同巻所収の書翰。

35 明治(21)年11月17日

過日は尊来鳴謝之至、其節御談話有之候郷氏進退之事、其後大蔵大臣之意見をも承候処、到底目下退職之上は元老院え転勤之外有之間布との儀に候処、於本人は元老院は好ましからずとの趣に付、不得止辞表之通被聞届候外有之間布と申儀に有之候。同氏も既に六十歳以上之事に付、勿論恩給之資格に適當に可有之、且勲章昇級之儀は、大蔵大臣自特別に申立可相成筈に申合置候。万一元老院承諾相成候へは、愚存に而は将来上院之議員中同氏の如き會計熟練之老輩有之候者、自から迂闊に不流して可然と存候へ共、本人之意に適せざる事を強ゆる訳に者参り申間布と愚考罷在候。小生も一応尋問之上及直話度候へ共、何分多忙に付賢兄自御面会之節御話置可被下候。尤、大蔵大臣は面会之上得と示談も有之候趣に付、事情は詳知之事に可有之と奉存候。不取敢成行及御内報候間、此段御承知可被下候。為其。草々頓首再行。

十一月十七日

博文

光頭賢台

〔封筒〕表、田中光頭殿、伊藤博文、親展至急。裏、緘。書翰冒頭に異筆で「十一月十七日」とあり。

36 明治(29)年9月2日

惠函薫誦仕候。如貴諭宿願被為聞食候事は、大勲位之蒙賞典候よりも尚一層聖恩に感泣仕候事に候。小子心中憂慮国家候事は、在官途と否とに於て毫髪も差異無之候得共、人情負端探之重責候と今日とは眼

田中光頭関係文書紹介(二)

食之安舒同日之心地に無之候。含雪帰京後図経営苦慮之事と不堪諒察候。園田安賢進退之事に付、御考案御示被下鳴謝仕候。如貴諭に而可然と存候間、御高配願上置候。宮内大臣え別に呈書不仕候間、老閣自宣布御鶴聲被下度候。草々頓首。

九月二日

博文

田中宮内次官殿

〔封筒〕表、田中宮内次官殿、親展。裏、緘、伊藤博文。

〔註記〕 田中の宮内次官在任期間は、明治28年7月1同30年12月。

園田安賢は、明治29年9月に警視總監を退官(明治24年4月に就任)。

〔春畝公手簡酉之巻〕

以下、同巻所収の書翰。

37 明治(19)年4月13日

漸次御快氣之由敬賀仕候。閣中各局人撰之事御指示多謝候。不日如尊慮奉行可仕候。東行二十年忌は明日に無之、旧曆四月に御座候故、五月十六日に相当候と申事也。此段御含迄申上置候。勿々頓首。

四月十三日

博文

田中書記官長殿

〔封筒〕表、田中光頭殿、博文、拜復。裏、〃。書翰冒頭に異筆で

「明治十九年四月十三日」とあり。

38 明治(20)年6月25日

御手簡拝読。二十一年度予算取調に付而は、新に雇外國人之俸給、旅費壹万式千円計之増額申立置度候間、御加入可被下候。他に者即今心付候儀も無之候。

昨日は黒田、吉井兩伯仙窟へ來訪有之、今日は又谷大臣之叩扉。彼是相考候へは、居所而已之僻場に而、居住する者は非仙次第に還俗之心持に相成、困入たる者と思案中に御座候。明後々廿八日迄に者一応帰京可仕候。其節万可得拜晤候。勿々拝復。

六月念五日

青山詞伯

蓬萊島主

〔封筒〕表、東京、内閣、子爵田中内閣書記官長殿、親展。裏、緘、

夏島、内閣総理大臣。書翰冒頭に異筆で「明治廿年六月廿五日」とあり。

39 明治(20)年6月13日

華族新旧共總人名簿入用有之候に付、至急御送可被下候。右は華族局へ御照会被下候へは即時相弁可申候。且亦現在之元老院議官人名簿及俸給之差同も記載有之もの、併而御送り方及御依頼候也。

六月十三日

夏島漁夫

田中書記官長殿

〔封筒〕表、麹町区元園町一丁目三十九番、田中光顯殿、伊藤博文。

裏、〆。書翰冒頭に異筆で「明治二十年六月十三日」とあり。

40 明治(20)年5月9日付山県有朋宛伊藤博文書翰

麹町区長中山孝麿、此度御用に付宮内へ転勤可申付答候處、右代りに大河内正質を御登庸被下候様両高崎自依頼有之、閣下へは小生自願置呉候様屢々承及居候に付、可相成儀候へは御承諾可被下候。為其。勿々頓首。

五月九日

山県大臣殿

博文

〔封筒〕表、田中内閣書記官長殿、親展、宮内卿。裏、緘。書翰冒

頭に異筆で「明治二十年五月九日」とあり。

〔注記〕封筒裏に、宮内卿と記されているのは宮内大臣の誤りか。

伊藤は、明治18年12月から同20年9月まで内閣総理大臣兼宮内大臣。この書翰は、山県から田中に転送されたものか。

41 明治(20)年6月28日

式部非職飯田年平病氣危篤に付、位階昇進之儀式部長官自申立候に付、至急御取計可被下候。本日行幸御留守中なれ者、聖裁は跡に而願出候共不苦候。為其。勿々不具。

六月二十八日

總理大臣

内閣書記官長殿

〔封筒〕 表、内閣、田中書記官長殿、親展。裏、緘。書翰冒頭に異筆で「明治二十年六月廿八日」とあり。

42 明治（20）年7月17日

今晚自富岡へ外務大臣同伴、兩三日海水浴に出懸け申候間、緊要之事差起候へは、同処へ急便を以て御知可被下候。富岡行之事は、聖上へ願上御聞届之上に有之候故、是亦御含置可被下候。函根辺へ参候事は、一応帰京之上に可仕哉。又は彼地自直に飛出し可申哉。其節為御知可申に付、其機に臨巖谷へ御命被下度候。此度陸軍大臣自上奏之檢閱条例、士官進級条例改正論に付而は、参謀本部之上官辺頗異論有之、三浦、堀江等外援之風聞も有之、又一方に者桂其外大威張に而、双方犄角之勢を張茲を詮度と氣張候模様に被聞候に付、知らぬ顔に而少々御探索可被下候。必竟此議論に而余波之影響する所如何と苦慮することとに御座候。何分近來多少党派之形情有之は頗憂慮に不堪事に御座候。此事故へは御秘置可被下候。為其。勿々頓首。

七月十七日

春畝

田中賢台

〔封筒〕 表、田中光顯殿、博文、秘展。裏、ノ。書翰冒頭に異筆で「明治廿年七月十七日」とあり。

田中光顯關係文書紹介（二）

「春畝公手簡戊之卷」

以下、同卷所収の書翰。

43 明治（20）年8月1日

長崎県水道工費下付之儀、内務大臣自再応之請求に付而は、如申立同省土木費中より廿一、二兩年度に分割し下渡之儀、既に大蔵大臣と協議済及内示候末に付不得止儀と存候間、御聞届相成、土木費増額之儀は難聞届段御指令有之之外有之間布候。

前文之趣意を以、指令案御調製閣議へ御提出可有之。勿々頓首。

八月一日

博文

光顯殿

〔封筒〕 表、田中内閣書記官長殿、至急。裏、ノ、總理大臣。書翰冒頭に異筆で「明治廿年八月一日」とあり。

44 明治（20）年8月5日

芳臘薰誥。倍御清適恭賀仕候。陳者内務大臣上奏山根正次を警察副長に被任、江口某を一旦非職とし直に復職可申付儀は、真に法律を玩弄するの甚しきものと云ざるを得ず。いかに立憲之政治にあらざるも、如斯の詐術は為すに不忍事と存候に付、内務、司法兩大臣談合之上山根を他日警察医に可被仰付事に取極め、特に洋行被仰付候様申立相成度段、今一応兩大臣へ御談合可被下候。司法大臣自略詳知は仕居候得共、斯く迄迂曲之仕方とは不存候故承り置候へ共警視其外之官吏に對

候而も不忍為事と存候。乍去他に方法無之との事に候得は、不得止任其意可申候へ共、可相成は再考相成度ものと存候間、可然御取計可被下候。

高島云々は尚亦御探聞被下度候。先は拝答而已。勿々頓首。

八月五日

田中書記官長殿

博文

夏島も此節は兎角雨天勝に而、其上夜間は蚊軍大夢襲来大に極困却居申候。

〔封筒〕 表、田中内閣書記官長殿、密展。裏、緘、総理大臣。書翰冒頭に異筆で「明治廿年八月五日」とあり。

45 明治(21)年3月5日

以病故御辞職相成候段御通知前、今朝或者自伝聞驚愕仕候。然るに御病氣之原因を拝察仕候へは、実に御難渋之場合に而何とか良案は無之ものかと奉存候。小生も一昨日力病出京候処、病後尚覚疲労為差用にも相立不申候へ共、不日に閉院之時期相迫居、何分病辱に安臥仕兼候。当分之つもりに出京仕候。其内得拜晤万御直話に相伺可申。不取敢拝答。草々頓首。

三月五日

博文

田中賢台

〔封筒〕 表、子爵田中光顕殿、博文、親展。裏、封。書翰冒頭に異

筆で「明治廿一年三月五日」とあり。

46 明治(21)年5月23日

近日承候得は、御宿痾之故を以内閣書記官長、検査院長共御辞職之趣に候処、可相成は此候御奉職有之度、総理大臣に於ても頻に希望有之候へ共、強而之御懇願なれば不得止儀に候処、検査院文だけは渡辺婦朝迄は是非御氣張被下度、公務上之儀は左迄繁劇に者有之間布に付、暫時之御心捧と御堪忍之外無之儀と奉存候。為其。勿々頓首。

五月二十三日

博文

田中老台

〔封筒〕 表、田中光顕殿、博文、密啓。裏、〆。書翰冒頭に異筆で「明治廿一年五月廿三日」とあり。

47 明治(23)年1月2日

新年恭祝之至に候。不相斐御繁忙拝察仕候。小子は無上之君恩に而無事平穩之春を迎、一身之幸福生来未逢之静閑を得申候。去説御劇務之央申上兼候処、従前警衛罷在候警部松下平助十七年以来小子に随従勤統罷在候ものに付、以御高配引統他大臣之警衛に被命候様懇願、承候へは農商務大臣警員未備由に付、可相成は補欠之御取計被下候へは、本人も一入之仕合可申、又巡查之面々も此際非職等に相成而は可憐次第に有之候故、是又御保庇偏に奉願置候。明三日自神戸へ家眷同伴、豚兒見舞之為罷越五、六日滞留可仕候。帰京之上緩々可得拝鳳万

事御注意從來之事情等御聞料、円滑之御処置肝要に奉存候。多数之人員御指揮は、随分御骨折之事は申上候迄も無之候処、万事跡掃り之せぬ様御注意無之而は、折角之御尽力も水泡に帰候様相成候而は遺憾之事に付、余計之心配と思召候敷も難計候へ共、平素之知遇に甘へ申上置候。草々頓首。

一月二日

博文

光頭老台

本文之趣意は、決而姑息之御処置有之様と申訳には無之、勿論国会も開設に際し国民之感触も前日とは大に異なり候儀に付、警官に在ては其職務施設之際、万事注意、揚げ足を取られざる様心掛候事尤必要なるは申迄も無之、要之適當の人物を得て一部々々の長たらしめ、敏捷の処置を施すこと云迄も無之、又老兄の御職掌に在ては、賞罰其当を得ると得ざるに依り、服従之厚薄を現はし候事と存候故、精々御注意可被成候。

〔封筒〕 表、警視総監田中光頭殿、親展。裏、緘、小田原、伊藤博文。書翰冒頭に異筆で「明治廿三年一月二日」とあり。

〔註記〕 田中の警視総監在任期間は、明治22年12月〜同24年4月。

〔春畝公建白書艸稿之卷〕
以下、同巻所収の草稿。

48 明治（ ）年（ ）月（ ）日

田中光頭関係文書紹介（二）

兵庫県属吏小菅揆一、号、□「香力」邨、起草する所なり。大沼沈山門人にして詩を善くし詩集若干巻あり。明治元年なり。伊藤の兵庫県知事の時。

兵庫県知事臣伊藤博文、謹んで北地凱旋の軍隊を処するの策を上言す。

本邦之政体におけるや上古は姑く置く。神武皇帝以後文武の権共に朝廷にありて、文以て教化し、武以て威鎮す。其統御、皆天子より出て敢て一人之を冒すものなし。

然して時代漸く変移し文教盛んなるに乗して、武威下に流れ、英雄時に起り、其権終に源平二氏に帰す。源頼朝、日本総追捕使の任を受けてより政令全く將門に出つ。今日に至るまで其制を革むるあたはず。其故何そや。中古以来の公卿大臣逸を貪ほり、勞を厭ひ徒に言辭を以て武臣を使役す。其始めは武臣も真に力を朝廷に尽せしも終に國家の大患となれり。抑も思ふ兵卒何れの処にありや。其本土にあり。將門、能く土地に在るの人民を使ひ之を克く服さしめ、人民も又之に服して終に土地人民俱に將門に歸し、其未諸侯はなく封境はなく、一塊も天子の有にあらざる如きの形勢たり。吁豈に歎するに堪んや。

然を今や幸に復古の時に際会し逆賊を殲滅し文武の権一に朝廷に歸するに至る。中外の治、□翹す可し。然して其賊を討滅せしものは誰そ。其兵士軍隊は皆諸侯よりなる。朝廷猶一卒の親衛なし。何を以て諸侯を威鎮し、而して海外各国に当らんや。天治国の術豈唯仁徳のみを以て論すへけんや。兵威も亦盛んに備はらすんはあるへからず。

見よ、此方を立る如何ん。今や東北衆賊平定せしなれば必征討將士

の功勞を重賞せざるを得ず。論者曰く、北地既に平定せしと雖も余微尚之れあるならん。故に総督より兵士に至るまで其土を割き交与せは一は勳賞の道となり、一は威鎮の術ともならんと。是必ず衆議の帰する所なるへきも、臣か卑見を以てすれば未だ然らず。自今後文明の治教を施し五洲各国と並立んと欲するや、世祿の□を□□□□□□立る不能は能知る所なり。況んや諸藩忠勇乃將士憤戰激闘身を奮て不顧為國賊を亡し、勞を厭はざるは皆愛君愛國之赤心より出て豈に他に求むる所ありて然らんや。雖然其功績已に成りて、朝廷、何そ其功を賞せざるを得んや。然り而して今之を封境の畧と為し、僻隅之地におかは皆共酷評せらるゝの懷ひをなし、却而其報國之本志を達しむる之道竭絶せんことを恐る。將士も又□として是に安んせんや。又之を其藩に退かしめ藩主におゐて尋常の祿賞を行ふとも兵士是を足れりとし区々たる藩國に自安せんや。

願ふに、則今大政一新の際にあたりて國安に大害をなせしもの東北会越の賊に過くへからず。此の賊を斥除せしもの其功世に冠たり。然れは大に之か功勞を顕さすんはあるへからず。人又謂ふ、普天の下の率土の濱王臣に非らざるなれば諸侯に預置する所の兵、皆天子の兵にして、天子、此に令を伝へは百万の衆も動くへしと。臣を以て之を視れば朝廷の兵権は名耳、実あるに非ず。故に、朝廷の力微弱なり。力微弱なれば下を御する能はず。今この制を立すんは終中古以来の代の如く又朝廷は、唯々たるに至らん。若かす、此機に乘し東北凱旋の兵をして改めて以て朝廷の常備隊とし総督、監軍、参謀以下皆至当の爵位をあたへ之に兵士を司さとしめ兵士にも亦班秋を付して各其処

を得さしめ而して大に欧州各国の兵制を折中し以て新に我兵制を改革し朝廷親しくこれを統御せんには。

今海内の兵を以て之を謂に□□北地に向ひしより強きはなしと。之に加ふるに以能く鍊磨せは其力益至明にして内は□庭を制し、外は万国に對し以て不可恥也。諸將士軍隊も天子親臨の恩を戴くに至れば欣々服従し方今一新の治、文武の二権克く天子に帰し、然後國威皇張、復古の勢隨て以て成□得へし。此則一は征討の軍隊を処し、二は朝廷を助け、三は威□を海外に輝せん。是則今日の急務也。願くは朝野の公議を経て以て万分之裨益たらんと欲し□「下力」か至愚を不顧謹而上言す。

〔註記〕 この草稿には多数の添削が加えられているが、翻刻にあたっては、成案と考えられる文章をつなぎ合わせた。伊藤博文の兵庫県知事在任期間は、明治元年5月～同2年4月。

山県有朋書翰（その二）

「含雪公手簡卷之一陸軍會計監督時代」

以下、同卷所収の書翰。

1 明治（ ）年2月6日

如貴論千里丸は余り急に有之候得共外に勘考も無之、明早天発途乗組可申奉存候。船室御取極置可被下候。従者は壱人にて有之候。御手数恐縮仕候。他、明朝拜芝万縷。拜復

二月六日

田中光顕様

山県有朋恐復

2 明治（ ）年8月12日

朋

今日、御出省之有無承合候処、既に御退舎に相成、不得拜晤引取申候。望御談判致度儀有之、一兩日中御閑暇之節、草慮え御来訪被下候は、仕合申候。余事議拜光候。草々頓首

八月十二日

有朋

田中老兄

「封筒」表、田なか様、山かた、拜復。

3 明治（ ）年8月17日

昨日者御来照忝多謝。其節御咄仕置候様来る廿日椿山荘にて御待可仕候。諸兄には三字比来訪と申遣置候得共、老兄には別に御さし支も無之候は、御早めに御来杖願ひ上候。他者拜青万縷。草々頓首

八月十七日

有朋

青山老兄

尚、福地自御回答落手。御手数を煩し恐縮。

「封筒」表、田中監督長様、内啓。裏、山県朋。

4 明治（ ）年11月11日

折角之御休暇に候処差向御談判致度儀有之、今朝八字頃自草慮え御鞍勞可被下候。為其さし急き拜啓

十一月十一日早天

田中様

5 明治（ ）年（ ）月16日

如何之御都合に有之候也。今日、午後一時比自墨水に趣き候覚悟に候。蝶なども參申候。是非御供不仕候否申試度候。

十六日

無隣庵

城南老兄

6 明治（ ）年9月16日

御精勤欣然此事に候。擬、參謀本部會計必至困難を極候儀は、過日略御内話を致置候様今日に至り如何とも不可為場合に立到、頻に減省之方法を試るも、三万有余之不足を不能補、此上者陸軍卿と談判之上政府に上申する外目的無之事と愁眉を顰め、予算書等小官手元にて為取調候処、豈図、海外費金之差額有之候故、早速、浅井大佐を以貴意為承候処、陸軍一般會計之不足を生し、此差額を以他費を補足する云々敬承。然処、昨年政府財政困難之一事俄然差起りし自陸軍額金を減省すべき議論再ひ内閣に発し、頗る同議相起候。其節、陸軍定額を減少するは、兵を減するより他策なし。何となれば會計上他省と異なり、

殊に充分節減を尽し、且計算上甚綿密に組立有之今日之形勢にては一錢を減却するの目的無之と断然小官自抗論せし所、遂に論鋒は變て參謀本部額金減少云々と転し、小官も内外よりの攻撃、加之事情百出不得止地位に立実に困却を窮、遂に本部額金減少の目的を以て事実には照量し可取調との事に立到十一万有余を減却し、残り三万有余は之を陸軍卿に談し事情酌量相成、一般之額金中自減省すべきと断決せられたる云々は、老兄に於ても悉皆事実御熟知有之候処、猶此余海外費をも他庁同様御看做し有之候ては、事情と云ひ理由と云、些と苦々布御取扱敷と察申候。此辺御推測相成度事に候。猶差額者他費に転用云々は、前条之理由に基き、無論本部の額金を除きたるものと確信致居候。前件之次第故、十四年度決算報告は、右之理由に基き取量ひ可申と決議致候。此趣不取敢申進置候。早々如此。

九月十六日

山県有朋

田中監督長殿

乱毫御推諉高恕。

〔註記〕 田中は、明治11年11月陸軍會計監督長、陸軍省第五局長、

同12年10月、14年10月同省會計局長。

7 明治（一）年12月3日

好天氣打続一段奉存候。扱、明日遑乗之儀、梶山自御咄致候事と察申候。然処、明日者延引仕候に付、賢兄諸否者未致拝承候得共、為念不取敢申上置候。孰明後日敷其次敷取極猶御一報可致候。勿々頓首

十二月三日

有朋

田中老兄

8 明治（一）年10月27日

御徒然想像仕候。扱、此程御談話仕置候恩給令一条に付、下士七年、満期後七年間は、年々幾分敷之増給も与候外、再四思慮致候共猶工風無之候に付、其組立にて恩給令草按取調させ申候。各年之増給、左まて之金高には及び申間布と臆測罷在候。猶、幾分増給之目途御熟考之上、増給表一繋取調させ可被下候。但、今般教導団生徒召募に応候者、只今之報告にては全員三ヶ之毫にも及び不申甚困却仕候。尤、征韓一事派及致候より大に障害を受候よし。是亦防禦之手段も無之事に候。他、拜晤繰述可仕候得共、前条之目的に基き御勘考草表取急御整させ相成候様にと存候。拜頓首

十月二十七日

朋

田中様

9 明治（一）年11月8日

今日者御処旁之よし御按仕候。扱、曾而御咄仕置候函館砲台近傍之土地譲渡之儀、今以何たる事も杉浦自不申參に付、其節万事組合向御承知有之事に付、御間隙督促書之草稿御調被下度。且小銃製造一条に付、金繰之儀御談致度明日御出省之御都合如何。其中御加養奉專折候。

拝頓首

十一月八日

山県朋

田中監督様

猶、覇城之景況詳悉不相分候得共、引続き追撃之趣報知有之。一両日中には全鎮定可致と察申候也。

10 明治（ ）年11月25日

昨夜は緩々御清語を承り積鬱を散し候。さて別荘之一事、大橋氏え御会話の期手に入候様御高配可被下候。去ながら、天涯之一浪生頗困窮之情態は御斟酌被下度奉存候。猶、尾川罷出候は、職務之か条無御心置御教諭、是亦懇願仕候。書余何も可謝拜晤候。不一

十一月廿五日早天

11 明治（ ）年11月26日

昨日は監督職務之律法書御投し被下忝奉存候。さて、頑生も俄浪花行之内命を蒙り、明後日より発程之覚悟に候。何か御用も有之候は、被仰越可被下候。はた仏蘭西法律書（ナポレオンコード翻訳書と欺云）写本御省に有之候よし、暫御一覽にて何も御承知と奉存候。上木は末二冊也。御高配を以写本老部当分拜借被下間布候也。為其懇と申上候。其中時氣御自重。頓首不一

十一月廿六日

猶、浪花南え之御伝言、積る貴愛え之玉章、此者え御附与可被下候。

田中光顯関係文書紹介（二）

御一咳。

〔封筒〕 表、多奈賀老兄、剣下、山県素狂。

〔註記〕 この書翰のあとに封筒のみの貼り付けあり。表、多奈賀老

兄、剣下、素狂拜。

〔含雪公手簡巻之二〕

以下、同巻所収の書翰。

12 明治（ ）年2月26日

今朝者御来訪忝深謝。例之事電話にて回答之旨趣は篤と考た上、明日面晤可申来との事に候。御承知置可被下候。為其。草々頓首
二月廿六日

椿山莊主

青山老閣坐下

〔封筒〕 表、青山將軍幕下、親展。裏、緘、有朋。

13 明治（ ）年5月1日

昨夜者御妨仕候。其節御依頼致候郵船会社株利足請取之証書差出申候。何卒杉に御面会之上御渡し被下度候。請取方之儀は、何とそ杉より可申上歟と察申候。

井上伯を暗殺せんとして未遂犯をなせしもの有之との昨夜半郵書接手。山口県何之地に候哉。其他は何も相知不申、いかにも不審に存候。御出省に候は、内閣辺にて御問糺し候は、相分り可申。果して真な

らしかは、烏渡御内報願ひ上候。草々頓首

五月一日

芽城山人

青山將軍幕下

〔封筒〕表、田中將軍幕下、親展急啓。裏、封、有朋。


14 明治（ ）年（ ）月19日

欲庵来訪、即時烏渡御来光可被下候。頓首

十九日

椿山莊主

青山老兄

〔封筒〕表、青山老兄、内啓急き。裏、。

〔註記〕欲庵は、野村靖（天保13〜明治43、長州藩、駐仏公使、内務大臣、逋信大臣、枢密顧問官）の号。

15 明治（ ）年6月10日

御佳勝欣然之至に候。此中は加茂岩清水等え行幸之事、早速御詮議被成下悉多謝。

扱、高杉かオテント号にて巖島沖に停船之幕艦を砲撃せし時、老兄にも同艦にて御進撃相成候やに相覚居候処如何や。若御乗組相成候は、当時之状況既略御記し可被下。乗船人は誰々なるや。幕艦停泊之場処は巖島沖と相記し可然や。彼より応砲いたし候や承り申度申述試候。草々頓首

六月十日大磯にて

芽城山人

青山芭蕉庵主人坐下

〔封筒〕表、東京小石川区関口台町、田中宮中顧問官殿、親展急啓。

裏、緘、相州大磯、山県朋。

16 明治（ ）年10月4日

今朝御内話仕置候閑院宮云々之事者、本日午後委員会にて談合可致含に候処、小松宮より皇族勲功詮議は、有栖川、伏見同様之事に此際取計置くれ候との依頼有之。追而、何分之儀は思召相窺取極め可申との事に内決候に付、事情縷々御内談を遂候事者取消被置候様所願候。朝来事情変換に付開陳仕候。余事在面晤。草々頓首

十月四日

椿山莊主

青山老閣坐下

〔封筒〕表、田中老兄、内披急啓。裏、緘、有朋。

17 明治（ ）年10月21日

今朝御内話之事に付、明四日夕四字過面会致度段申遣し候処、其刻来訪可致との事候間、三字比には草慮え御来光被下度御待申候。草々不尽

十月廿一日

椿山莊主

芭蕉庵老台坐下

〔封筒〕 表、青山田中老兄、内啓。裏、絨、椿山莊主、朋。

18 明治（ ）年11月18日

今朝者態々御來訪を煩し多謝。其節御内話仕候様三野村えは一書投し置申候。五番丁家の事は遺言書中、京師木屋町別邸之如く可致存候処、多忙にて別に書記候時間無之に付、孰京師より歟又は帰京後相認め可申に付、右様御含置可被下候。家事詳細之儀は今朝相願ひ置、誠に安意之旅行相楽み申候。臨発一書拜呈。時下寒氣日々相増、為国家御自重千金。草々頓首

十一月十八日夜七時

芽城山人朋

青山田中老台 坐下

尚、御令聞え可然御一聲可被下候。再白

〔封筒〕 表、青山田中將軍幕下、親展。裏、絨、有朋。